

## 「校舎内の大きなクモ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「キノコ」「へび」について、正しい知識を持つ人は少ない。大多数の方は、野生のキノコを見つければ「きっと毒だ」と思い、へびを見れば「毒へびじゃないの?」と、「とりあえず」警戒する。特に「赤いキノコは毒」というのは、広く信じられた迷信だ。



「タマゴタケ」(北軽井沢・大学村で撮影)

写真は「赤いキノコ」の代表格の「タマゴタケ」である。テングタケ科の代表種で、土を掘ると、根元に「ツボ」(外套膜)が見られる。見るからに毒々しいが、この菌は無毒で、むしろ優秀な食用キノコの一つである。秋の雑木林にごく普通に見られ、今の季節、子どもたちが発見する機会も多い。

キノコとは「子実体が肉眼で見える大きさの真菌類の俗称」と言い換えられる。日本に産するキノコはおよそ 3000 種とも 4000 種とも言われるが、そのうち「毒菌」はせいぜい数%、食すると死に至るような「猛毒菌」は、十数種類しか知られていない。

同じことは「クモ類」にも言える。小さなクモなら誰にもほとんど問題にされないことが多いが、「巨大なクモ」の場合、「毒グモでは?」とか「噛まれないかな?」と一瞬引いてしまうだろう。先日、校舎内でその事態が発生した。大きなクモがいたのだ。



発見したのは、児童玄関の近く「雄飛の広場」と呼ばれる場所だ。本来は、子どもたちが集う「いこいの場」なのだが、現在は登校時の「体温検査場」として使われている。幸い、発見したのは児童登校前だった。



近づいてみると、かなり大きい。最前脚の端から最後脚の端まで 10cm 以上ある。恐らく、私が「対面したクモ」の中では最大だ。



クモの名称はわからないし、万が一「外来の猛毒種」で、子どもがむやみに触れたりしたら、翌朝の朝刊に載ってしまうので、捕獲して調べることにした。クモは一切抵抗せず、驚くほど素直にガラス瓶に収まった。